

広島県深安郡神辺町について

——地域開発論への一つの試み——

片岡俊郎

I

広島県深安郡神辺町は、広島県の東南部に位置し、東は岡山県井原市及び笠岡市に接し、西、南、北は、福山市に囲まれている。

神辺町は、1954(昭和29)年3月、1町5村の合併により誕生し、現在では、人口4万人を擁する備後圏の主要市町の一つである。なお、1町5村とは、川北村と川南村が合併した旧神辺町と御野村、竹尋村、湯田村、中条村、道上村である。

神辺町は、古くから陸上交通の要衝として、歴史と文化の町として栄えてきたが、将来的には活力ある文化都市として、新たな飛躍と発展が期待されている。陸上交通の要衝とは、神辺本陣の所在地であったことであり、歴史と文化の町とは、数々の古墳群、古代の備後国分寺、中世の神辺城、近世の本陣、廉塾等が存在したからである。

神辺町は、高齢化・少子化、高速交通化、高度情報化、経済のサービス化、国際化等、神辺町をとりまく新たな社会・経済情勢の変化に対応するため、1992(平成4)年3月、第3次神辺町新長期総合計画を策定した。

第3次神辺町新長期総合計画は、「山と川のある都市^{まち} かなべー青壮老の共生空間—」をテーマに、「歴史文化都市“かなべ”の創造」「山と川を大切にする自然環境都市の形成」「幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせる

コミュニティ都市の形成」を3本柱としてまとめられている。第3次神辺町新長期総合計画の策定に関しては、神辺町長期総合計画審議会委員として、福山大学から、工学部土木工学科の尾島勝教授、経済学部経済学科の渡部尚史助教授と私が参加した。

第3次神辺町新長期総合計画の策定後も、私は、神辺町の研究に取り組むことになる。研究の一部は、広島県東部の経済旬刊情報誌『経済レポート』に、1992(平成4)年6月15日号より連載し、本年末には終了予定である。

私が連載中に痛感したことは、経済学的視角から都市^{まち}づくりに接近するためには、従来の経済学という分野に縛られることなく、視野を拡げて、文化と経済の関係まで踏み込まざるを得ないということである。

したがって、本稿では、既発表の文章を加筆修正するだけでなく、新たな構成の下に論を展開している。その意味において、本稿は、神辺町研究の序論である。しかも、神辺町が生んだ教育者でもある江戸時代の漢詩人菅茶山研究のプロローグでもある。

II

神辺町が生んだ江戸時代の漢詩人、菅茶山^{かんちゃざん}(1748～1827年)については、大岡信『折々のうた』、『第四 折々のうた』(岩波新書)で、次の詩が紹介されている。

「満^{まん}巷^{かう}の蟬^{せみ}声^{こゑ} 槐^{くわい}影^{えい}の午^{ひる} 山^{さん}童^{どう}戸^こに^そ沿^そうて 香^{かう}魚^{ぎょ}を^をる^る」(夏のうた)
「雪^{ゆき}は山^{さん}堂^{だう}を^{よう}擁^{よう}して 樹^{じゅ}影^{えい}深^{ふか}し 檐^{えん}鈴^{れい}動^{どう}かず 夜^{よる}沈^{ちん}沈^{ちん} 閑^{かん}に^{らん}乱^{らん}帙^{ちつ}を^ぎ収^ぎめて^を疑^ぎ義^ぎを^を思^{おも}ふ 一^{いつ}穂^{そう}の^{せい}青^{せい}燈^{とう}万^{ばん}古^この^こ心^{こころ}」(冬のうた)

中村真一郎『江戸漢詩』(岩波書店、1985年)には、「夏のうた」は全文が紹介され、次のように訳されている。

「溪^{せき}村^{らい}雨^{しゃ}ナク二^に句^く余^やり、石^{いし}瀬^せ沙^さ灘^{たん}、水^{みづ}涸^かレ初^{はつ}ム。満^{まん}巷^{かう}ノ蟬^{せみ}声^{こゑ}、槐^{くわい}影^{えい}ノ午^{ひる}、山^{さん}童^{どう}、戸^こニ沿^そヒテ香^{かう}魚^{ぎょ}ヲ売^うル」

「谷あいの村に、二十日あまりも雨が降らずに、川の水も涸れはじめた暑い盛りの真昼時に、村じゅうに、槐えんじゅの木影で蟬の鳴声ばかりがうるさく響くなかで、静まりかえった道を、家々の軒をつたって、山から来た小僧が鮎あひこを売って歩いて行く。炎暑の日中で、村人たちは何をする気力もなく、昼寝でもしていて、街道には人影もなく、聞こえるのは蟬の声と鮎売りの少年の呼声ばかり…」

神辺町は、山と川のある町なのである。

「冬のうた」は、『菅茶山 六如（江戸詩人選集、第4巻）』（岩波書店、1990年）で、黒川洋一氏が次のように訳している。

「雪はわが山家やまがをおおって樹木の姿がくろぐろと見え、軒ばの風鈴も動かず夜はしんしんとふけわたる。取り散らかした書物を静かに片付けて疑問の箇所を考えつづけていると、一穗の青い灯火がよろず代のいにしえ人の深い心を照らし出してくれる。」

また、「折々のうた」（『朝日新聞』、1991年8月8日）は、次の通りである。

「反照は楊林やうりんに入りたれば／沙湾しゃわんは晩も未だ暝いまからず／母牛ぼぎうと犢とくじ児とは／水あひこを隔あひこてて相呼応あひこせり 菅茶山

『黄葉夕陽村舎詩』所収。備後（広島県）の人で江戸時代漢詩人中の大家。文政10年80歳で没した。備後の風土色豊かな作風は、現代にも愛読者が多い。『路上』と題する。夕日が照り返して川やなぎの林にさしこみ、湾曲したなぎさは日暮れになってもまだほの明るい。母牛と子牛（犢）は川をへだてて互いに呼び合っている。決まり文句の多い江戸漢詩の中に置くと、清新な描写が群を抜く。」（『第十 折々のうた』）

神辺町新長期総合計画の三本柱、「歴史文化都市“かんなべ”の創造」、
「山と川を大切に自然環境都市の形成」、「幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」は、菅茶山の詩からも十分読み取れる

ことがわかる。

神辺町の本陣は、上野邦一『宿場と本陣（日本の美術、285号）』（至文堂、1990年、2月）で、次のように紹介されている。

「神辺宿には東本陣・西本陣があり、西本陣の尾道屋を号する菅波家がのこっている。神辺宿を通行する公用旅行者・大名の大多数は東本陣を利用していたが、筑前・黒田藩は専ら西本陣菅波家を利用した。万延2年(1861)に黒田家の一行は580人で、藩主と供54人が本陣に宿泊し、残り的人々は86軒に分宿している。

西本陣は神辺宿のほぼ中央に位置し、広大な敷地を構える。表門・座敷部や土蔵群をのこすが、居室の棟を失っている。座敷部・居室部は別棟で表屋造風になっている。座敷部は4室あり、絵図によれば一番格式の高い部屋は『御成間』と呼んでいた。門から玄関に至り、鍵の手に折れ曲って『御成間』へ至る。居室部・座敷部を分けて連結する典型的な配置である。普請文書から主要建物は天保年間の建設である。」

また、次のような紹介がある。「本陣という名が定着する以前は、大名などが休泊する施設を『茶屋』と呼んでいた地域がある。津山藩は大原宿に『茶屋』を、高遠藩も領内の街道沿い宿場に『お茶屋』を設けた。正保元年(1644)若狭国絵図では、熊川宿に『茶屋』があったことを記載している。山陽路・神辺宿にも『御茶屋』跡があるし、熊本・山家宿には『茶屋』絵図がある。」

上野邦一氏は、江戸時代の宿場、本陣に興味を示し、町づくりとの関係を次のように説く。

「町並み保存は、町の変化を否定するような保存ではなく歴史的遺産を生かした町づくりと把握すべきである、と私は考えている。その意味で町並み保存は、歴史的遺産を蓄積している町や地区の未来の課題なのである。」

神辺町新長期総合計画で「山と川のある都市 ^{まち} かなべ」は、わが国の社会・経済情勢の変化、高齢化・少子化、高速交通化、高度情報化、経済のサービス

化、環境保全意識の拡大、生活意識の変化に答えた上で、独自の都市^{まち}づくりをしなければならないとしている。

神辺町新長期総合計画では、山と川から、山脈軸、河川軸が取り出され、軸と流れが強調されているが、本陣は、江戸時代、人、物、情報、資金の流れの拠点であったことを思い起こせば、時代の要請に答える都市^{まち}づくりは、神辺町の先人が常に取り組んできたことである。しかも、現代の我々に受け継がれていると考える時、神辺町が、現代の本陣として再生することが、上野氏のいう未来の課題ということになる。青壮老は、力を合わせ、単独市制を目指すべきであろう。

『備後古城記』によれば、神辺城は建武2年(1335)に築城されたという。備後の国では、山名氏が応永8年(1401)から天文7年(1538)までの137年間、守護を務めていた。山名氏が在地生え抜きの武士、杉原理興^{ただおき}に滅ぼされたのが天文7年なのである。『神辺城をめぐる武将（神辺の歴史と文化、第10号）』（神辺郷土史研究会、1983年10月）によりながら、神辺城の歴史を述べれば、次のようである。

永正年間(1504～21)頃より、周防の大内氏と出雲の尼子氏の勢力が増大し、備後地方も両勢力に左右されることになる。このような状況下、備後の守護、山名氏が応仁の乱以後、分裂していたため、尼子氏方の山名忠勝は、惣領家の山名祐豊が派遣していた守護代太田垣氏を攻め、神辺城を占拠していた。

天文7年(1538)、大内義隆は、これに対抗し、山手銀山城城主、杉原理興を遣わし、神辺城を攻略する。在地生え抜きの武士から神辺城主となった理興は、杉原の姓を改め、代々備後守護であった山名氏の姓を名乗る。山名理興は、大内氏と結び、備後南部の在地武士を従え、領国化を進めて行く。また、神辺城を一層堅固に修築し、神辺城下には、城下町が形成され始める。

天文9年(1540)、毛利氏の本拠、吉田の郡山城が尼子氏の大軍に包囲された際、大内氏方の山名理興は、陣中見舞の使者を郡山城に派遣する。

天文11年(1542)、大内氏は、大軍を率いて尼子氏の本拠、出雲の富田城を攻略するが、失敗に帰す。山名理興は、備後南部の在地武士の多くと共に、今度は尼子氏と結んでしまう。大内義隆は失地回復を計るため、備後南部の政治・経済の要衝、神辺城に攻撃の目標を絞る。天文12年(1543)の末、重臣弘中隆兼、毛利元就等をして神辺城を攻撃させる。6年間にわたる神辺城合戦が始まるのである。

天文17年(1548)、持久戦に入った時点で、毛利氏の国衆である平賀隆宗が、義隆に神辺城攻撃の一切を任せてほしいと進言し、許されるものの、7月3日、にわかに病死する。隆宗の遺志を継いだ家臣達は、激しく神辺城を攻撃する。9月4日、理興は夜陰に乗じて城を脱け出し、出雲富田へ逃走する。

天文20年(1551)、大内義隆は、陶隆房^{すえ}の反逆にあい、長門国大津郡深川大寧寺で自殺する。毛利氏は、しばらく陶氏に服属の姿勢を示すが、天文23年(1554)、陶氏と断交する。

弘治元年(1555)、山名理興は、これを機に元就に詫を入れ許され、神辺城に帰城する。理興は、本姓の杉原氏に戻る。毛利氏に許された杉原理興は、毛利氏の備中進攻の第一線に立つものの、弘治3年(1557)、中風のため没する。

杉原理興の後嗣問題が起こり、毛利元就の三男、小早川隆景は、理興の筆頭家老であった杉原興勝を、元就の二男、吉川元春は、理興の末席家老、杉原盛重を推挙する。毛利元就は、元春の意見を入れ、盛重が神辺城主となる。

杉原盛重は、毛利氏の尼子氏攻撃の先鋒として、山陰地方を転戦する。その間、神辺城には、盛重の息子弥八郎(元盛)、又次郎(景盛)を留め、所原肥後守に城代を命ずる。

永禄11年(1568)、盛重は、毛利氏の北九州、大友氏攻撃のため、山陰から九州に転じる。翌、永禄12年(1569)、旧勢力である藤井皓玄等が、その隙に乘じ、神辺城を占拠する。しかし、杉原氏側は数日にして奪回に成功し、藤井皓玄は殺され、以前と同様、城代は、所原肥後守が務める。盛重は、再び山陰に転じ

るが、天正9年(1581)、病死する。

天正10年(1582)、盛重の長子、元盛は、弟の景盛に殺され、天正12年(1584)、景盛も、毛利氏によって自殺させられる。羽柴氏、毛利氏の争いに巻き込まれた結果である。

毛利輝元は、杉原氏を取り潰した後の神辺城に、毛利氏譜代の国司右京亮等を奉行として派遣し、神辺城及びその周辺を毛利氏の直轄地とする。輝元は、元就の長男、隆元の長子である。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元は、防・長二国の大名となり、芸備両国は、福島正則が広島城主となり、治める。福島正則は、神辺城に、筆頭家老、福島丹波守正澄を配する。

元和5年(1619)、福島正則改易後、安芸には浅野氏、備後には水野勝成が配せられる。勝成は、ひとまず神辺城に入り、元和8年(1622)の福山入城までとどまる。その後、神辺城は、廃城となり、政治の中心は、福山城に移るのである。

神辺城の歴史は、血で血を洗う歴史であり、政争は、外部の要因、尼子氏と大内氏、尼子氏と毛利氏、羽柴氏と毛利氏の勢力争いに左右されたものである。

神辺城の歴史から学ぶことは、神辺町が、単独市制を目指すとするれば、政争の町から脱却する必要がある、ということになる。

神辺町には、備後国分寺があった。

堀池春峰「東大寺の歴史」(『入江泰吉写真集、東大寺』、小学館、1992年5月)によりながら国分寺について述べれば、次のようである。

和銅3年(710)、平城遷都が行われた。時に、中国では、唐朝が支配していた。唐朝は、李姓を称したため、老子を祖とする道教を国教としていた。しかし、隋朝からの政策も引き継ぎ、仏教の興隆も図る。高宗は、一州に一寺を建立し、則天武后は大雲寺、中宗は竜興寺、玄宗は開元寺を設け、国家の安寧を祈願させた。わが国の国分二寺は、これら唐朝の官寺制を範としたといわれて

いる。

天平12年(740)9月、藤原広嗣の乱が大宰府で勃発する。翌、天平13年(741)2月、聖武天皇は、災異や国難の鎮圧防止を説く「金光明最勝王経」「法華経」をよりどころとして、国分二寺を全国に創設させた。

国分二寺とは、僧・尼寺併置のわが国独自の制度である。国分寺すなわち僧寺を金光明寺、国分金光明寺、尼寺を法華滅罪之寺、法華寺と称した。

国分寺は、「国の華」として「好处を択んで」新造されたという。しかも、国分二寺の造営は、国司に一任されたため、その国の財政事情、国司の宗教的熱情、さらに、造寺造仏を担当する技術者の確保の必要から、遅速が生じたという。

『広島県史、原始、古代』(広島県、1980年2月)は、国分寺と国府との関係から、備後国制施行当初は、神辺平野に国府が設けられたという説を紹介している。

「備後国分寺が深安郡神辺町下御領の現在の国分寺の南にほぼ方600尺を画して営まれたことがいまや明らかになってきたので、国府もその付近に求めなければならないというのである。すなわち国分寺も国分尼寺もこれを府中市に求めることは困難であり、国分寺は奈良時代の当初から府中市でなく、深安郡神辺町大字下御領の現在の国分寺の南側に営まれていたことは疑いをいれない。」

「国分尼寺もかつては府中市栗柄廃寺に擬する説も行なわれたが、神辺平野の国分寺跡の西約500メートルの湯野の小山池廃寺が尼寺跡であるとの推定が行なわれている。」

「もしこの神辺平野に当初国府が建設されたとすれば、その遺跡としては大字湯野の『方八町』とよばれる地域をあてるべきであろう。(中略)。湯野の方八町は現在は狭少な区域となっているが、方八町の称は国府の異称とすべき確率はきわめて高いといわねばならない。しかも現地が古代山陽道の官道に臨んでいることもその可能性を示すものである。」

奈良国立博物館は、昭和55年4月29日から6月1日まで、特別展「国分寺」を開催した。備後国分寺について、同展図録は次のように記している。

「備後国分僧寺

僧寺 広島県深安郡神辺町下御領

福山市の北約10キロメートルの神辺町の中央部に位置し、現在古義真言宗国分寺の南200メートルの畠地周辺が遺跡である。

寺跡は高屋川が流れる神辺平野の東北縁にあたり、背後に100～200メートルの丘陵が連なり、その丘陵の南側の山麓部に位置する。

発掘は昭和47年から50年まで4次にわたって行われている。

当国分寺の寺地は、まだ明確にするまでに至っていないが、条理制の遺構から方二町と想定されている。

主要な伽藍は、南に南門、東に塔、西に金堂、北に講堂を配し、法起寺式伽藍配置と考えられる。

古瓦は鎌倉時代を含めて鎧瓦十形式、宇瓦九形式が知られ、創建瓦は難波宮の系統をひく重圈文鎧瓦と重廓文字瓦である。

僧寺の西500メートルに白鳳時代の創建になる小山池廃寺が存するが、尼寺にはまだ断定されていない。」

国分二寺のよりどころとなった「金光明最勝王経」については、備後国分僧寺に安置されていたと伝えられる「紫紙金字金光明最勝王経」を、同図録は次のように紹介している。

「^{ししきんじこんこうみょう}紫紙金字金光明最勝王経 十卷、奈良時代、八世紀、国宝、奈良国立博物館蔵

この経典が読誦される国は四天王などが守護すると説くもので、法華経・仁王経とともに鎮護国家の仏典、即ち護国三部経の一つに数えられた。唐の義浄の訳で十巻からなる。先行経典に金光明経、合部金光明経があり、都合、三種の漢訳がなされた。四天王寺を建て、最勝会が催されるなど、本経が及ぼした

影響は大きいが、中でも聖武天皇は平城京の東に東大寺、各国に国分寺(金光明四天王護国之寺)を建立し、寺ごとにその塔内に紫紙金字の本経を安置させた。本遺品はその国分寺経の一つで、広島県尾道の西国寺に旧蔵されていたもので、もと備後国分寺に安置されていたものと伝えられている。十巻完備しており、今回出陳の高野山・竜光院のものと並び、その価値は高い。特に当館のものは原表紙を残している。唐風の秀れた書は同時代の他の写経より抜きんできており、その謹厳・端正な経文は写経生の内でも特に優れた人によって書写されたものであることを示している。細い金の界線、光を増すため猪牙で磨かれた金字の輝きは今日でも変わらず、当時の技術の高さもさることながら、紫紙に金字の映えた美しさは奈良時代最盛期の香気と品格をたたえた遺品であることを示している。」

備後国分寺の存在から、神辺町が学ぶことは、次のように整理できる。

わが国の国分二寺が、当時の世界国家の一つである唐朝の官寺制を範としたことから、備後国分寺は外に開かれたものであり、神辺町が国際化にも対応しなければならないことを示している。

国分二寺が全国に創設され、備後国分寺もその一環であることから、神辺町の町づくりは、国、県、広島県東部の市町との協力関係に留意しなければならないことを示している。

国分二寺が「国の華」として「好处を択んで」新造されたことから、神辺町が快適な生活空間を保証しなければ、古代は現代に^{よみがえ}甦らないことになる。

備後国分寺の存在から、備後国府を想定する考えは、神辺町が、政治、経済、文化のバランスのとれた町づくりを指向しなければならない考えにつながる。

備後国分寺が「高屋川が流れる神辺平野の東北縁にあたり、背後に100～200メートルの丘陵が連なり、その丘陵の南側の山麓部に位置」していたことから、神辺町が「好处」であることと、高屋川、丘陵群の存在、即ち山と川を擁していることの重要性を、われわれは見落してはならない。

備後国分寺と紫紙金字金光明最勝王経との関係からは、全10巻完備しているものが、全国で二つ、しかも由緒が明確なのが、備後国分寺安置分であることは、老壮青一体となり、文化が継承されてきた意味を考えさせてくれる。

『広島県史，原始，古代』（広島県，1980年2月）には、広島県知事，宮澤弘が，次のような序を寄せている。

「歴史とは、『過去がわれわれに対してもつ意味の解釈である』といわれています。このことは、過去における出来事がそれぞれ相互に関連性をもっており、それが思索をとおして整序されていく過程のなかから、一つの『理念型』に統合されていくことを意味しているものと思います。」「わが広島県土に先人が創造してきた歴史は、まず、集団としての生活形態を形づくり、そして、自然に働きかけるころから始まります。これこそが『歴史の原形』というべきものであり、その後、これらの諸集団がそれぞれ独立した『世界』を形成しながら、また相互に連結しながら、つぎつぎと生活の新しい局面をうちひらいてきました。そこには、それぞれの時代の地域を舞台にした『人間劇』が、国家とのかかわり、さらには世界との対応のなかで主体的に展開されていったのであります。このような過去との『歴史的接触』は、誰しも願うものですが、そこから『歴史的感興』が呼びさまされ、そして『歴史的理解』に到達するものと考えます。」

歴史から学ぼうとする私の姿勢と宮澤弘氏の「序」は、重なる。

神辺町の亀山遺跡は、広島県内での弥生遺跡として有名である。

『広島県史，原始，古代』（広島県，1980年2月）は、旧石器，新石器，縄文，弥生時代を原始としている。以下、『県史』による説明である。

「瀬戸内海の沿岸部や河川の流域、あるいは盆地の縁辺部には弥生時代前期の遺跡が多く見られる。広島市中山町の中山貝塚は海岸に近い微高地にあるが、深安郡神辺町の亀山遺跡は芦田川の流域平野の真中にきわだった独立丘上に位置している。」

弥生時代は、弥生前期、弥生中期、弥生後期と分けられるが、亀山遺跡は、弥生前期の遺跡であり、丘陵地に存在していることが特色である。

「亀山遺跡は深安郡神辺町道上にある。神辺平野のほぼ中央部に位置する標高37メートルの亀甲形の独立丘の東斜面と西斜面に遺跡が存在する。安山岩製の石鏃・石ヒ・磨製石包丁・石斧などが出土していて、古くから石器製造跡といわれていた遺跡である。土器は弥生前期と中期のものを出し、前期の土器は重弧文・凸帯文や平行沈線文のほどこされた壺、刻み目や平行沈線文の甕などである。」

弥生時代は、農耕文化の時代であり、稲作社会なのである。

「農業が狩猟や採集に比べてはるかに高度の生産形態であることはいうまでもない。しかし、農業が日本でいつごろからはじまったかははっきりしない。縄文時代後期に現われてくる農耕が主要な生産様式になるのはようやく紀元前5世紀ごろの弥生文化期に入ってからである。弥生文化期の農耕を生み出したのは大陸から伝えられた新文化であり、特に鉄器がその引金となった。そして日本列島に住んでいた倭人たちは、長い停滞の縄文時代を脱することができたのである。

ただしかし、弥生時代初期の農業はまだ幼稚なもので、耨耕の名でよばれる程度のものではあった。」

「弥生前期の稲作は、農業一般が耨耕の段階であったと同じく、狩猟・漁撈・採集にわずかに添加される程度にすぎなかった。耕地も、海岸砂州の後背湿地とか河川流域の一部が利用されていた程度であった。広島市の中山貝塚の人々は、海岸砂州の後方にできた湿地を耕作していたし、深安郡神辺町の亀山遺跡の弥生人は、台形台地の麓に広がっている芦田川流域平野ではそばと稲作をはじめた。」

女王卑弥呼が君臨した邪馬台国の存在は、紀元2～3世紀頃、弥生後期にあたるといわれる。邪馬台連合の有力な一国、戸数5万の^{とうま}投馬国を福山市鞆にあ

てる説の根拠に、後背地に発達していた亀山遺跡等の大規模な弥生集落を見落してはならない。

III

神辺町の歴史を、近世、中世、古代、原始と遡って見てきた。

近世は、神辺本陣。中世は、神辺城。古代は、備後国分寺。原始は、弥生遺跡である亀山遺跡である。

神辺町が生んだ江戸時代の漢詩人、菅茶山(1748～1827年)は、教育者でもあり、神辺に廉塾を開いた。

菅茶山は、杜甫の影響を強く受けていたといわれる。杜甫には「春望」という詩がある。吉川幸次郎『新唐詩選』（岩波新書、1952年）によりながら紹介すれば、次のようである。

春 望

國破山河在 城春草木深

感時花濺淚 恨別鳥驚心

烽火連三月 家書抵萬金

白頭搔更短 渾欲不勝簪

^{なが}
春の望め

国破れて山河は在り

城は春にして草木^{そうもく}深し

時に感じて花も涙を^{そそ}濺ぎ

別れを恨みて鳥も心を驚かす

^{ほうか} ^{さんがつ}
烽火は三月に連なり

^{ばんきん} ^{あた}
家書は万金に抵る

^か ^{さら}
白頭の搔きて更に短く

^す ^{かざし} ^た
渾べて簪に勝えざらんと欲す

杜甫、46歳、^{あんろくざん}安祿山の叛乱により、叛乱軍の陣営に拘禁されていた時の作であるといわれる。

「国破れて」とは、国家の機構が解体して、ぼろぼろになってしまったことをいう。しかし、山河大地は、そうした人間の不幸に超然として、そのまま存在する。城郭にかこまれた町々に、春はことしもめぐり来た。人間はその秩序を失っても、自然はあくまでもその秩序を失わない。

時世のありさまに悲しみを感じて、花も心をいためるのであろうか。涙をこぼすように、はらはらと散る。また人人がちりちりになってしまった不安な空気の中では、鳥のなき声も、何となく不安げである。

3月は陰暦の3月、陽暦でいえば4月。安祿山の叛乱によってあちこちに起^{のろし}る烽の火は、この最も美しい月になっても、まだやまない。家からの消息が得られるならば、おのれはそれを万金に相当するものとして、貴重しよう。

憂いにまかせて搔く白髪^{かんざし}の、搔けば搔くほどぬけまさり、簪をさすにもたえかねそうだ。

黒川洋一氏は『菅茶山 六如(江戸詩人選集、第4巻)』（岩波書店、1990年）の解説で次のように述べている。

「茶山をもし大詩人と呼ぶことが許されんとするならば、それは別の点に求められなければなるまい。それは、茶山が小さなものをただ小さなものとしてではなく、大きな世界に連なるものとして捉えていたことにある。いい換えれば、茶山が一つの思想を持つ詩人であったということである。(中略)〔茶山の三つの詩をあげて〕さながらに杜甫の詩を読むかのごとき感がある。」

菅茶山については、森鷗外(1862～1926)、富士川英郎(1909～)、中村真一郎(1918～)が関心を示している。なかでも、富士川英郎氏は『菅茶山と頼山陽』（平凡社「東洋文庫」195、1971年）、『菅茶山』（筑摩書房「日本詩人選」30、1981年）、『菅茶山』（福武書店、1990年）と精力的に取り組んでいる。

『菅茶山と頼山陽』「序に代えて」で、氏と森鷗外との関係を次のように述

べている。

「菅茶山に私が興味をもちはじめたのは、大学を卒業した数年後に、森鷗外の『伊沢蘭軒』を読んでからのことである。」

「私がそんな茶山にあらためて興味をもつようになったのは、前にも言った通り、鷗外の『伊沢蘭軒』を読んでからのことである。それは初めて岩波書店から『鷗外全集』が出たときだから、昭和11年のことになる。当時、私は『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』『北条霞亭』等、鷗外の史伝をゆっくり、かなりの時間をかけて読んだが、そのうちでは『伊沢蘭軒』がいちばん面白かった。これはいまでもそうであるが、その面白さの一つは、その前半部において、伊沢蘭軒と菅茶山というふたりの人物が二本の柱のようにたてられ、日常のさまざまな出来事がそれを取りまいて展開してゆくにつれて、一方で、細心精緻な校勘学者であるとともに、豪放磊落で、時に倨傲^{きょごう}なところもあったらしい蘭軒と、温雅で、村夫子^{そんふうし}然とした茶山の人柄が、そこに彷彿として浮かびあがってくることにある。殊にそのなかに引用されている蘭軒宛の茶山の二十幾通かの書簡は、温雅寛厚で、諧謔を好み、おそらく座談の名手であったに違いないと思われる老詩人茶山の面影を伝えて、余すところがないと言ってもいいだろう。私はこういう茶山の人柄に強く惹かれた。それはいまでも変わりはないが、実を言うと、このときもまた、そういう好ましい文人としての茶山の印象が私の脳裡に刻みこまれただけで、私はそれ以上に深く茶山の世界へ入ってゆくことをしなかった。」

「茶山が江戸時代の卓れた詩人として、しかもその後期を代表する詩人として、私の目の前に現われてきたのは、やっこの十数年来のことである。そして、このときもまた、そのきっかけは、必要あって、『伊沢蘭軒』を再読したことにあったが、このたびは江戸時代の知識人の生活と文化ということが私の念頭に強くあったので、茶山もまた、その関連のうちで捉えられることになった。」

富士川英郎氏が、菅茶山に関心を示すのは、江戸時代の知識人の生活と文化という観点であるのに対して、中村真一郎氏は、江戸漢詩に興味を向けるからである。

中村真一郎氏には、『雲のゆき来』（筑摩書房、1966年）、『頼山陽とその時代』（中央公論社、1971年）、『詩人の庭』（集英社、1976年）、『江戸漢詩』（岩波書店「シリーズ・古典を読む」20、1985年）等の著作がある。

『江戸漢詩』「まえがき風に」で、次のように述べている。

「日本の古典を現代の読者の鑑賞に供するこの双書のなかに『江戸漢詩』という一冊が入っていることに、多くの人は怪訝の思いを抱くかも知れない。が、江戸時代の文学読者なら、現代の人々のその疑問の方に、却って不審の念を覚えただろう。

端的に言うと、江戸時代の人々の文学的営みの中心にあったのは、浄瑠璃でも俳諧でも、またあの龐大な随筆類でもなく、いわんや人情本や洒落本のたぐいでもなく、実に漢文による著述だったのである。

江戸人にとって、最大の思想家は疑いもなく宣長よりも徂徠だったろうし、詩人は、芭蕉よりも茶山だったかも知れない。散文家としての名声は山陽が遙かに馬琴を上まわっていたのである。」

「今日、私たちが学校で常識として学ぶ文学史では、江戸時代は町人文化であり、そこに栄えたのは、近松、西鶴にはじまり、一九、三馬に終る『町人文学』である、ということになっている。これは江戸時代の終り頃の知識人の誰ひとりの容認しない、文学史の見取図であつたろう。彼等にとっては近松は愉しい娯楽であり、西鶴の名は知らず、いわゆる天保六花撰の戯作者たちは、婦女子の玩弄物として一顧も与えられず、彼等は専ら17世紀以来輩出した、数多い儒者たちの哲学的文学的著述に親しむことを読書生活と信じていたのである。」

「私のこの本は、そうした文学史の近代的歪みに対する、バランスの回復のための一聯の試みのひとつである。そしてここでは、まず対象の時代を江戸後

期に限定しようと思う。(中略)。(その理由の)第三は、これが最も重要な理由であり、しかも読者の殆んどの方にとっては、耳新しい事実かも知れないが、18世紀末のいわゆる寛政の改革によって、江戸昌平しょうへいこう黌が幕府の官学となるに及び、学問振興の気運が全国に拡がり、各藩は競って藩校を創立することになる。そして、昌平黌の卒業生は、それらの新設の学校の教官として、次々に就職して行くという、知識人の登用の時代が開けた。」

福山藩の「高級官僚」になった茶山も、その中に位置づけられるのであるが、中村真一郎氏の関心は、作家、詩人としてである。

森鷗外が史伝の対象とした渋江抽斎、伊沢蘭軒、北条霞亭は、『コンサイス日本人名事典、改訂版』(三省堂、1990年)によると、次のように記されている。

渋江抽斎(1805～58)、江戸後期の儒医、医を伊沢蘭軒に学ぶ。

伊沢蘭軒(1777～1829)、江戸後期の儒医、父の跡を継いで福山藩主侍医となる。

北条霞亭(1780～1823)、江戸後期の儒学者、備後国神辺の菅茶山に招かれ、後、福山藩の儒官となる。

菅茶山(1748～1827)と伊沢蘭軒、北条霞亭との関係は、備後神辺と備後福山を結び、渋江抽斎を考慮に入れば、備後福山は、江戸知識人を巻き込み、江戸文化の一翼を担っていたことになる。神辺町と福山市、福山市と東京へと、問題意識が呼び起こされ、拡がるのである。

しかし、森鷗外の史伝に対しては、杉浦明平氏(1913～)の次のような見解がある。(筑摩版、森鷗外全集、第6巻、月報、1959年)

「二十余年ぶりで読み返してみて、わたしはかつてより鷗外に遠くなったのをおぼえた。第一に、制限漢字と新かなづかいになじみきったいまでは、鷗外の文字の並びかたそのものに異質なものをを感じるようである。しばらく読みすすめば、歴史かなづかいの世界になれることもできるが、それでも『適(ゆ)く』『廢(や)めた』『纔(わずか)に』のごとく、たいして特殊でない用字にすらぶ

つかると共に、一種のとまどいをまぬがれがたい。たとえば『酒壚』『刻成』『帰寧』『尺牘』のような平生使い忘れてしまった漢語にいたっては、なおさらである。わたしの様に三十年間、旧かなづかいや漢字のつめこみを呼吸したきたものですら、そうだとしたら、戦後教育をうけた世代の目に鷗外の史伝がどのようにはるかな世界としてうつることであろうか。引用された書簡の候文もそうであるが、相当たくさん挿入された漢詩にいたっては、現在のていどの漢字知識をもった若い世代にいかに縁遠いものであるだろうか。鷗外の史伝が今後ますます難解なものとなるだろうという材料ばかりがたくさんある。まがりなりにも、史伝の世界に近づきえたのは、われわれが最後の世代になるかもしれない。」

森鷗外の世界を我々に近づけるための努力は、菅茶山の世界を現代に甦^{よみがえ}らせることによって、実を結ぶ可能性も出てくる。

また、吉田精一氏の次の一文にも注目したい(前掲書、解説)。

「鷗外が山陽を好まなかったことは明らかである。それが必要以上に、彼と対角線上にある人物を称揚しようとする傾向を行文に匂わせる。いわば『山陽癖』に対する『非山陽癖』である。」

菅茶山と頼山陽、菅茶山と蘭軒・霞亭、視点の違いである。

鷗外は、山陽の先祖について言う。

「山陽が廣嶋杉木小路の家を奔つたのは九月五日である。豊田郡竹原で山陽の祖父又十郎惟清の弟傳五郎惟宣が歿したので、梅颯は山陽をくやみに遣つた。山陽は従祖祖父の家へ往かずに途中から逃げたのである。竹原は山陽の高祖父總兵衛正茂の始て來り住した地である。^(もと)素正茂は小早川隆景に仕へて備後國に居つた。そして隆景の歿後、御調郡三原の西なる頼兼村から隣郡安藝國豊田郡竹原に遷つた。(中略)。

山陽は京都の福井新九郎が家から引き戻されて、十一月三日に廣島の家に着き、屏禁せられた。時に年二十一であつた。」(『伊澤蘭軒』、その二十)

一方、鷗外は茶山の先祖についても、次のように言う。

「茶山が神邊の菅波久助の倅百助であつたことは、行狀にも見えてゐるが、頼の頼兼を知つた人も、往々菅の菅波を知らない。」（『伊澤蘭軒』，その二十四）

頼家が、広島県西部と結びつけられ、菅家は、広島県東部ということになるが、先祖を考慮すれば、菅茶山、頼山陽共、広島県東部、即ち備後所縁^{ゆかり}の人物なのである。

また、鷗外は霞亭の先祖について、次のように述べている。

「福山藩に傳ふる所の『北條系圖』の首にはかう云つてある。『天正十八年七月小田原落城せしかば、同年秋北條家の一門家老悉く高野山に登りしが、同年冬山を下り、麓の天野に居住す。其後家祖は志摩鳥羽の城主内藤志摩守忠重に仕へ、其子道益齋の時、内藤家斷絶して浪人となり、同國的屋に隠れ、醫を業とす。』此に『家祖』と云ふものは、其名こそ詳ならね、即霞亭の高祖である。」（『北條霞亭』，その四）

道益，了普，道可，道有と続き、霞亭は、志摩国的矢、即ち三重県南部の人なのである。

鷗外は言う。

「これに似て非なるは、わたくしが澁江抽齋のために長文を書いたのを見て、無用の人を傳したと云ひ、これを老人が骨董を掘り出すに比した學者である。此の如き人は蘭軒傳を見ても、只山陽茶山の側面觀をのみ其中に求むるであらう。わたくしは敢て成心としてこれを斥ける。わたくしの目中的抽齋や其師蘭軒は、必ずしも山陽茶山の下には居らぬのである。」（『伊澤蘭軒』，その二十）

鷗外の文章は、茶山、山陽に対して、抽齋、蘭軒をあげ、抽齋、蘭軒に重きを置くようにみえる。しかし、蘭軒伝に続き、鷗外の著わした霞亭伝においては、茶山は、一般にいわれる「山陽癖」に対する「非山陽癖」の枠外に立った

人物として現われるのである。茶山が相次いで塾頭に迎えた山陽、霞亭は、出身地も違い、性格も異なるのに、両者に共感が生じるからである。

菅茶山を知るためには、直接茶山の文献に接することも重要ではあるが、森鷗外、中村真一郎、富士川英郎氏等の菅茶山論から出発するのも一つの方法ではないかと思う。

IV

茶山の時代の神辺、あるいは、周辺の産物について、森鷗外『北條霞亭』では、次のように述べられている。霞亭が、江戸、京でも、過した人物だけに興味深い。

まず、麴の保命酒については、

「^(さて)扱尊大人様に此方産物何ぞ差上たくぞんじ含み罷在候得共、殊之外物事不自由の地何も無之、皆京大坂にありふれ候物計に候。麴の芳命酒(保命酒)と申ても甘味すぎ候もの、^(そうめん)索麴よろしく候得共、云々」(その六十七)

次に^{そうめん}索麴については、

「産物と申もの、よそへやりて、それほどに人の思はぬもの多きものに候。備後人がさうめんを人にやるとて、上方人のをりふしわらひ候よし、尤のことに候。」(その百七)

また、川、海の産物について、

「此方^{(すっぽん)(うなぎ)}(神邊)鱈、鰻鱺等澤山なる地に候。菅翁はすべて厚味の物養生に^(てくちにたちもうされ)而絶口被申候。」(その七十一)

「大人様にこの邊のぶり(海鰻)又はさより(鱻)などを差上たく心懸候へども、實はたわいもなきもの、且は諸方へ世話かけ候も氣之毒に候故、先差上不申候。」(その百三)

「海ぞうめん少々差上候。大人様へ御上可被下候。是は但馬城崎より出候のみとぞんじ候處、先日御領内田島と申處に而とれ候とて、其土人の手製をくれ候。

さしみ、いり酒のわきもりによろしく、京に而よく遣候遣候。」(その百十八)

「^(ついでながら)廣島のり乍序少々封入仕候。異郷の風味に候故也。御閑酌御試可被成候。」
(その七十八)

しかし、広島のにについては、手厳しい。

「廣島のり少々、これは淺草などにかわりも無之候へども、土地の産故懸御目候。粗なるのりは伊勢あまのりに少しもかわりなし。」(その百三十一)

さらに、^{えんき}園弁野菜、^{そさい}花卉蔬菜について、

「去年まき候なでしこはさき申候哉。此方此節一面さき候て見事に候。」
(その百五)

「あさがは種少々差上候。^(しょうしゅう)漳州種の中には常の種、須磨などいふしろき種もまじり候。來年三月頃御まき可被成候。松なのたねは御地にも可有之候へども差上候。うらのすみか畑のすみに、いつにても御まき置可被成候。先春がよろしく候。」(その百七)

また、茶については、

「此茶當國神石郡龜石と申處の新茶、粗茶に候へども土物故差上候。とても上方の茶には似より候ものにてはなく、田舎むき茶づけにこく出し而よきかに候。」
(その七十一)

最後に、天変地異について、

「四月晦雷雨に、此邊^(おびたしくひょう)夥敷雹ふり申候。大いなるは七八匁位かけめ有之候。福山邊は野菜麥穂を大に損じ候。」(その百十四)

霞亭の自然に対する見方は、生活に根差しているのである。神辺町研究には、森鷗外『北條霞亭』も役に立ちそうである。